
がんばれ元サラリーマン

クターの米

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がんばれ元サラリーマン

【Nコード】

N4580P

【作者名】

クターの米

【あらすじ】

学校を卒業して就職後

ようやく3年経ち、仕事も生活も毎日が同じ単純作業の繰り返しになっ
ていたある日

日常が非日常に変わってしまった。

第0話 始まり前の朝（前書き）

読みにくい！！

わかりづらい！！

文章がおかしい！！

ってかんじでございますが何か問題でも（ひらきなおり）

駄作ですが生暖かい目で見えてやってください

何か問題でもって言うておいて

自分はものすごく打たれ弱いので

「ツマンネー」「クダラネー」等

マイナスな感想は勘弁してください

プラス面の感想は「はい、喜んで！！」ってな感じですけど

みなさまよろしく願います

第0話 始まり前の朝

P i P i P i P i . . . P i P i P i P i

「ふああゝあ」

目覚ましの音で目を覚ました一人の青年が目覚ましに向かって手を伸ばした

カチッ

目覚ましを止めて寝ぼけた顔をサッパリさせるために洗面所に向かおうと起き上がり洗面所に向かった

顔も洗って目が覚めた青年は台所で食パンを取りトースターにセットした後

ポットのお湯を使ってインスタントコーヒーを作りイスに座ってTVの電源をいれた

ザー．．．．．

「へ．．．．．」

時計を確認すると何故か3時30分で止まっている携帯の画面も同じで、しかも圏外になっている

カーテンを開けて窓の外を見ようとしたのだが

「まっくらでなにもみえない・・・」

普通ならばんやりと周りが見えるし

街灯なり自販機なりどこかしら灯りがあるはずなのに

一切何も見えず闇と言うよりも絵の具の黒を窓全体に塗ったかの用に何も見えなかった

何がおきたかまったくわからない青年は窓の前で立ち尽くしていた時

TVの画面がノイズから真っ黒の画面に切り替わり

画面の中心に渦ができていた

渦はだんだん大きくなっていき何かを吸い込もうと引き寄せ始めた

「・・・いつてー」

ぼーっと立っていた青年はただ立っていたけなので

急に後ろの方から引く張られる事で後ろに転がり頭を打ってしまった

そして痛がっているうちにTVの渦に飲み込まれてしまったのだった

第1話 始まりの日

草原の上で青年「宮沢 刀夜」(ミヤザワ トウヤ)は目を覚ました

「あれっ・・・家で転んでたのに・・・どうゆうこと？」

周囲を見渡して見ると草原から少し離れたところに街道らしきものが見えた

「とりあえず誰か人がいないか街道っぽいところを歩くしかないか・・・」

刀夜は立ち上がり街道に向かい歩き始めた

「部屋着にスリッパって・・・こんな格好で知らない人に会って不審がられるよなあ・・・」

今の刀夜の格好はTシャツにスウェットパンツだから不審がられることは普通ならないのだが

足元がスリッパなのだ

「せめてサンダルならなあ・・・」

と、思考がどこかおかしく部屋での出来事、急に草原で倒れていたこと等不可思議な点に関して

無意識的に脳が考えることを否定して、できるかぎりいままでの日

常で自分のいた日本のどこかだと

信じたがっていたのだ

「それにしても空気がいいなあ」

と、いまだに現実逃避しながら街道をテクテク30分程歩いていると、前の方から二人組みの男女が歩いてきた

刀夜は二人組みに話しかけた

刀夜「すいませーん、聞きたいことがあるんだけどいいですかー？」

二人組み男「ん、聞きたいこと？別にかまわないよ」

刀夜「ここっていったいどこなんですかね？」

二人組み男「どこって、オレンジ村とオレンジ山の間ってとこだね」

刀夜「オレンジ村？どこですそれ？日本にそんな村ありましたっけ？」

二人組み男「日本？なんだいそれは、ここはラインハルト王国の端っこの方の田舎村付近だよ」

（ひょっとして・・・ドッキリ？・・・そんなわけないよな・・・目の前にいる二人も剣とか弓もってるしひょっとして・・・違う世界にきてしまったのか・・・）

二人組み男「それにしてもそんな軽装で武器ももたずにオレンジ山に行くのかい？」

二人組み女「何か困ってるようだけどどうしたんだい？」

（たぶん異世界から来ましたとか言っても信じてもらえないし頭おかしいやつだと思われるよなあ）

刀夜「記憶が無くて何故ここにいるのかもわからずに誰かと出会わないかと歩いていたんです」

二人組み男「それは大変だな、とりあえず一緒に村までいくか？一人で歩いてると危ないし」

刀夜「いいんですか！！ありがとうございます。お願いします」

二人組み女「私の名前はマウアーよ、よろしくね」

二人組み男「ジャックだ」

刀夜「刀夜って言います、よろしく マウアーさんジャックさん」

ジャック「呼び捨てでいいぞ、同じぐらいの歳っぽいしな、それにしても名前は覚えてたんだな、それ以外は何か覚えてないのか？」

刀夜「すいません、まったくわかりません」

マウアー「誤らなくてもいいのよ、とりあえず村に行ってゆっくりしたら思い出すかもしれないし」

刀夜はジャックとマウアーと一緒に街道をオランジ村に向かって歩

き始めた

ジャック「それにしてもトウヤ、運がよかったな」

刀夜「何がですか？」

ジャック「たまたま俺たちが通りかかったからいいものの、その格好でオランジ山なんか行ったら十中八九魔獣に喰われてたぞ」

刀夜「マジですか！」

マウアー「脅かすわけじゃないけどたぶんそうだったでしょうね」

ジャック「俺たちでも油断したら危ない場所だからなあ」

刀夜はジャックとマウアーと話しながら3時間ほど歩いた

ジャック「ここがオランジ村だ、刀夜一応聞くけど金持っていないよなー？」

刀夜「何も持っていないですねえ・・・あ・・・これって売れませんかね？」

刀夜は自分の左手につけている銀の指輪とちっちゃいルビー等の宝石のついている指輪を見せた

マウアー「！！それって銀！！もうひとつも銀にしかも精霊石までついてるじゃない！！」

刀夜「精霊石？ルビーとかエメラルドの事ですか？それにそんなに驚いてるってそんな価値あるんですか？」

ジャック「そんな価値って銀の指輪だけでも金貨50枚以上は間違いないし、精霊石のついてる指輪なんて値段がつけられないぐらいのものだ」

マウアー「こんな村じゃ売れるところなんてないわね」

ジャック（トウヤはどこかの貴族か王族としか考えられないな、複数の精霊石をつけた指輪なんて初めて見たしな）

ジャック「まあ銀の方は売っても問題ないとおもうが売る場所がないんじゃないしょうもならんからな、一緒にラインハルト城の町まで行くか？途中にある交易が盛んな町でもいいし、そこで指輪を売って金にするか途中でギルドの依頼を受けて稼いで返してくれるのなら当面の面倒はみてやるぞ」

刀夜「そこまでしてもらっていいんですか！でも・・・わるいですよ」

マウアー「トウヤ・遠慮するのは礼儀としていいかもしれないけど、どうしようもできないじょうたいで遠慮するのはおかしいわよ」

刀夜「・・・面倒見てもらっていいですか？」

ジャックはニカッと笑うと

ジャック「ちゃんと返してもらってから心配するな」と冗談っぽく言った

刀夜「ありがとう」

マウアー「とりあえず宿屋に行つてご飯でもたべましょ」

二人に連れられて宿屋に行き

初めての異世界での夕食を初めて出会った人にお金やこの世界での知識の面倒をみてもらい

初めての日を無事すごすことができた刀夜であった

第1話 始まりの日（後書き）

セリフばかりになってしまいました（汗）
ちよっと書き方などを勉強してわかりやすいようがんばります!!

第2話 ジャックの異世界講義

刀夜は目を覚ました

そこは、見知らぬ天井だった

「どこ、ここ？・・・って二回目か」

と独り言をしていたとき

「ようやく起きたか、よく眠れたみたいだな」

ジャックに言われて外を見てみるとすっかり日も昇り前の世界で言うところの正午ぐらいまで太陽が昇っていた

それから食堂に行きジャックとこの世界の生活等の常識を教えてもらいながら朝飯を食べていた

「まず、金のことだが、銅貨 銀貨 銀板 金貨 金板 の五種類があり銅貨10枚で銀貨1枚 銀貨10枚で銀板1枚ってかんじで10枚で一つ上の物と同じ価値になる。この宿屋が一晩で銀貨3枚飯が一食銅貨3枚ってところだな。一般の農業とかで生活してるやつは一月だいたい銀板4枚あるかないかってとこだろうな」

（つてことは銅貨で100円か120円ぐらいってことか・・・金板って一枚100万！・・・それよりもただの銀の指輪で金貨50枚以上って500万以上の価値があるのか・・・銀貨があるから銀自体に価値があるわけじゃない？どうゆうことだ？）

「一応見ておいたほうがいいだろ？右から銅貨　銀貨　銀板　金貨
だな」

テーブルの上に置かれた銅貨や銀貨を見ていくと銀貨も金貨も全部
が銀や金でできているわけではなかった

「銀貨とか金貨って銀と金が少ししか入ってないみたいだけど・・・」

「

「それだけ価値があるのさ、銀には不死に対抗する力が込められて
いるし金は魔力の底上げができるしな、もともと物々交換だったも
のを金を作って交易できるようにするんだから価値の高いものでや
らないと信用もできないし国が金を使えなくするとかしても銀や金
が入ってれば別の国でも価値があるし、銀と金が入ってるから商
人と普通に取引できるしな」

「なるほど、そういえば一月って何日で一月なの？あと年が変わる
のは何月で？」

「月の欠けてから丸くなってまた欠けるまでが30日それで一月だ、
一年は8月でかわる、風水火光土雷氷闇の順番で変わっていくぞ、
これは魔法の属性にあるものなんだが平民にはまずかわりのない
ものだな、ハンターでも魔法をつかえるのは極少数しかない、国
の兵士でも魔法が使えるだけで隊長クラスだからな」

「魔法って存在するんだ・・・でもなんでそんなに使える人が少な
いの？」

「魔法を使うには精霊の力が必要らしいんだが、トウヤのもってい
る精霊石がないと使えないんだ、それに才能もいるらしいから自分

が使える可能性のある精霊石を手に入れたり精霊石を持っていたても才能がなかったりと、まあ運がよければ使える用になるかもってなとこだ」

「じゃあ俺も使えるかもしれないってことか・・・」

「そこは専門家に聞くしかないな、どちらにせよ交易がさかんならズベールの町に言ってみないことには何もはじまらんよ、ハンターのギルドもそこまで行かないとないからな」

「そつえばハンターとかギルドって何？」

「ハンターってのは簡単に言えば何でも屋だな、ギルドってところで仕事を斡旋してもらって依頼をこなして金をもらう。モンスター討伐だったり、薬草や鉱石の採取だったり、護衛とかもあるぞ、家の庭の草むしりとかお使いとかもあるぞ、トウヤもとりあえずギルドで身元の確認と登録されてなかったら一応身分証代わりにギルドカード作つといたほうがいいぞ、いろいろ使えるからな、ギルドのある町ならギルドカードで買い物ができるし金庫もタダで貸してもらえるしな」

「何もなくても登録できるの？」

「おう、体の中にある魔力を感知してやるだけだし・・・っていうてもよくわからんからそこらへんは、ギルドで聞いてくれ
飯も食つたし最低限の装備ぐらい整えるか・・・トウヤいくぞ」

「え・・・金ないよ」

「面倒みるつつたろー、遠慮しないでいくぞ、死なれてもこまる

から」

「う・・・お願いします」

刀夜はジャックにつれられて村唯一の道具屋に行くことになった
店に入るとゲームでみたようなものがいろいろ置いてある。

ポーション、解毒剤、まんげつそう・・・

（いろんなゲームごっちゃじゃねーか！！）

「何かあったか？トウヤ」

「何でもないよジャック」

「とりあえず、こいつにあった服と靴に上からつけれる防具と武器
あるか」

ジャックが店の主人と話しているとき、刀夜は隅の方で埃をかぶっ
ている剣を手にとった

するとその剣は突然光だし話かけてくることもなくぼろぼろのさび
て使い物にならない剣だった

刀夜はゴミおくんじゃねえよと思いながら元の位置に戻しジャック
のところに戻った

「トウヤ とりあえず服と靴に防具はあるみたいだから着てみる」

そういわれたので着替えてみたらサイズはぴったりだった

「なんかごわごわするなあ」

そうおもいながらジャックのところに帰り着替えたことを伝える

「お、中々似合ってるぞ、武器はとりあえずショートソードぐらいしかないからこれでいいだろう？」

そう言つて手渡されカバンも買つといたと一緒に渡されたのでスウェットパンツをかばんに放り込んで道具屋をでた

ジャックと話ながら宿屋にもどつた時

遠くから複数の音が村に近づいてきていた

第3話初めての戦闘

「ん？」

刀夜は遠くから何か走ってくる音が聞こえ、その方向を振り返った

「トウヤ、どうした？」

「何か走ってくる音が聞こえないか？」

「走ってくる音？」

「徐々にこっちに近づいてきてる」

ジャックと話していたそのとき、宿屋の二階の窓からマウアーが顔を出して叫んだ

「ジャック！！ハウンドの群れが村に近づいてる！！」

「どのくらいの数だ！！」

「15から20体くらい！！」

魔獣の中では最弱に近いハウンドだがまったく戦えるかどうかかわからないトウヤでは危険だと判断して置いていく事に決めた

「20ぐらいならいけるな！マウアー俺たちで蹴散らすぞ！！」

トウヤは宿屋の中でまっとけ！！マウアーいくぞ！！」

そう言うジャックはハウンドが来ている方に走り出した

後を追って弓を持ったマウアーが走っていく

ハウンド：魔獣 狼に近い存在で農民の大人の男ぐらいなら平気で殺せるぐらいの力は持っている。一般的に魔獣は動物よりも危険で凶悪な存在なのだが熊よりも弱い
ハウンドの数が多いため被害が多いことから魔獣扱いされている

- side ジャック -

村の入り口の柵の外でジャックとマウアーはハウンドの群れを迎え撃つために戦闘の準備を整えていた

「そろそろくるぞ！・・・来た！！ 援護頼む！！」

そう言うジャックは迫りくるハウンドの群れに向かって走った

ヒュン ヒュン

ジャックとハウンドがぶつかり合う前にマウアーの射撃が走ってくるハウンドの顔面に突き刺さり、二体のハウンドを倒す

先頭のハウンドがいきなり倒れた事と前から走ってくる人間の気迫に一瞬ハウンド達はその場で停止した

だが立ち止まった事により、二体マウアーの射撃の餌食になってしまった

ハウンド達は止まっていると殺される事と遠距離から射撃をして仲間を殺された怒りによって一斉に動き出す

ジャックは前から迫ってきたハウンドを袈裟切りに一閃

”ドチャ”

真つ二つに切り裂かれ血だまりを作るハウンド

一体・・・また一体と切り捨てていく

そしてマウアーの精確な射撃

ものの3分もたたないうちにハウンドは3体になっていた

そこでハウンドは逃げ出した

逃げ出した3体のハウンドはバラバラになって逃げていく

逃げるハウンドに向かってマウアーは矢を放つがさすがに三方向に逃げていくハウンドを倒すことは難しかったらしく一体逃がしてしまったところで戦闘が終了したのだった

- side out -

刀夜は最初宿屋の中でジャックに言われたとおり待っていようと思っただが犬の吼える声が薄っすら聞こえてから気になり始め、宿屋の外で待っていた

（ハウンドって犬？犬が魔獣とか言われるわけないか）

と考えていると

「うわー！！」

ジャック達が走っていった村の入り口とは反対の方向から悲鳴が聞こえる

刀夜は何事かと思い悲鳴がした方に向かって走り出した

そこには血を流して倒れている男の咽喉を噛み千切っている1・5メートルぐらいある狼がいたのだった

ハウンド
狼は今噛み千切った人間は死んだと判断して自分の方を見て立ち止まっている人間に向けて走り出す

（狼に噛まれてる・・・あの人・・・死んだ・・・）

初めて目の前で人が死ぬのを見た刀夜はぼーっと立っている

人が目の前で死んでいたら普通はパニックになったりするのだろうが初めての死に加えて狼に咽喉を噛み千切られているというあまりにも衝撃的な事が目の前で起きていたため刀夜は理解できずに啞然としていたのだ

そんなぼーっとたっている人間なんて楽に殺せると一気に距離を詰めるハウンド

迫りくるハウンドに目では見えているのに頭はまったく反応しない刀夜

ハウンドは刀夜の咽喉に向かって鋭い牙をさらしながら突っ込んでくる

「あぶない!!」

突然大きな声が聞こえ刀夜の思考が現実に戻ってくる

「あああああ!!」

咄嗟に咽喉をかばった刀夜の左腕にハウンドの牙が刺さる

「いてーーーーー」

あまりの痛さに刀夜はハウンドをはがそうと左腕を振る

”ブン　ブン　ブン　ブン”

上下に揺らされるハウンドはたまらず口を空けて刀夜の腕から離れる

刀夜は元の世界では別段何か鍛えてたわけでもないのだから1・5メートルもある狼を　ましてや噛まれている上体で振り回すなんて芸当できるわけもないが

今は痛みと恐怖でそんな考えが思いつくはずもなく左腕の傷をかばいながらジャックに買ってもらった剣を構える

ハウンドは振り回された事には驚いたが刀夜の目が恐怖の色に染まっていることがわかると再度突撃をする

刀夜は迫ってくる狼があまりにも怖いと思い逃げたかったが逃げられるわけがないと思い恐怖で目を瞑りながら精一杯の力で剣を振り下ろした

振り下ろしていくと急に感触が重くなり最後には動かなくなったので目を開いてみると

剣が地面に半分ぐらい刺さっていた

目の前に狼の姿はなくどこいった？と思い周りをみて驚愕する

ハウンドは真つ二つに左右に分かれて後ろに倒れていたのだ

（どうなったんだ・・・）

と思っていたと

「君すごいんだね、ぼーっとたつてたと思つたら急に腕でハウンドの攻撃をガードするし　しかもハウンドに噛まれてるのに振り回すし　最後は真つ二つに切るって!!」

「?・・・おれ?」

「あたりまえじゃないか!!ハウンドを倒してくれてありがとう死んでしまったあの人には申し訳ないけど、被害が少なくてたすかったよ。」

「やっぱりあの人しんでたんだ・・・」

「こんなこと言うのはよくないんだけど一人で済んでよかったよ・・・前回ハウンドが村に来たときはもつとしんじやったから・・・でも!君のおかげで被害も少なくて済んだし本当にありがとう!!君とりあえず川にでも行つて返り血を流してきたほうがいいんじゃないかな?気持ち悪くないかい?」

「返り血?」

刀夜は自分の体をみて前全身ハウンドの血で真つ赤になっているのを見て貧血になって倒れてしまった

「君!!どうしたんだ!!大丈夫かい!!」

村人は刀夜を背負い宿屋に歩いていった

第4話戦闘後

ジャックとマウアーが宿屋に戻ってくる途中遠くから叫び声らしきものが聞こえてきた

「ジャック、聞こえた？」

「ああ、いくぞ！」

二人は一斉に走り出した

宿屋を通り過ぎ少しすると何故か刀夜を背中に乗せた村人が歩いていた

「いったい何があったんだ」

「この方がハウンドを倒してくださったのですが何故か気絶してしまったので宿屋にお送りしようと思ひまして」

「トウヤがハウンドを・・・俺の連れだから後はまかしてくれ、あと反対の入り口にハウンドの群れの死体があるから他の獣や魔獣が来る前に片付けておいてくれないか？」

「ハウンドの群れが来ていたんですか、ありがとうございます、あなた方三人は村の恩人です、死体の処理ぐらいよろこんでやらせてもらいますよ」

村人から刀夜を渡して貰う時血まみれの刀夜を心配するマウアー

「ねえ、トウヤ怪我してない？」

「左腕を噛まれてましたが宿で消毒すれば大丈夫だと思いますよ、トウヤさんが起きたらみなさん村長の家にきてくださいますか？」

「わかった」

「ええ」

「それでわ」

ジャックは刀夜を背負うと宿屋に向けて歩き出した

「それにしてもハウンドを倒すとは思ったよりやるな」

「そうね、でもなんでこんなに返り血を浴びてるのかな？」

「まあ起きたときに聞くとしてマウアーわりいんだけどトウヤの服買ってきてくれ」

「わかったわ、じゃいつてくるわね」

ジャックはトウヤを背負い宿屋に、マウアーは道具屋に歩いていった

宿屋で消毒用の薬草を貰い部屋で刀夜の服を脱がし腕の消毒をして刀夜が起きるのをまつた

「あれ？なんでベットのの上？何故下着だけ？」

「目覚ましたな、ほれっ」

服を刀夜に投げる

「とりあえずそれ着て食堂にきてくれ」

そう言つてジャックは部屋をでる

刀夜は急いで服を着てジャックの後を追つた

「俺たちがハウンドを倒しに行つてる最中に何があつた？」

刀夜はベットで起きる前までの覚えていることを二人に話した

「・・・なるほど」

「そつえばあのトウヤが起きたら村長の家に来てほしいって行つてたからいこうか」

三人は宿屋の主人に村長の家の位置を聞いて村長の家に向かった

第4話戦闘後（後書き）

短くて申し訳ないです

少しずつ増やせていけたらいいと思います

更新は1〜2日に一話はしたいとおもっております

第5話異常な力

「この度は、村の危機を救ってくださってありがとうございます。そちらの黒髪のお方、お怪我は大丈夫でしょうか？」

「平気ですよ、おもったよりたいしたことなかったのです」

「それはなによりです、それにしても村の外にあった大量のハウンドはすごかったですな、お三方がいなかったらと思うとぞっとしますよ。」

これは少なくて申し訳ないですがとつといってください」

そう言つて村長はテーブルの上に大きい袋と小さい袋と刀夜の剣をおいた

「これは？」

ジャックが代表して聞く

「状態のよかったハウンドの毛皮と少ないですがお礼金です、後村の中で地面に刺さっていた剣を持ってきたおきました」

「ありがたく頂戴しておく」

「ありがとうございます」

「それと些細ですが夕食を食べていってください」

そう言われ三人は村長の家で夕食をご馳走になり宿屋に戻つてこの

日を終えた

翌日三人はオランジ村からラズベールに向けて出発した

「ところでさあジャック、ラズベールってどこまでどれくらい掛かるの？」

「まあ途中で魔獣に襲われたりとか何事もなければ3日つてところだな、まあそんなことあるわけないんだがここの辺はハウンドぐらいしかでてこないからよっぽど大丈夫だとおもうぞ」

「3日・・・ってことは野宿だね？」

「あたりまえだ（でしょ）」

そんな風に話しながら歩いていると街道の脇からハウンドが跳び出してくる

「三匹か・・・マウアーは手を出さなくていいぞ」

「了解」

「トウヤ村でも一匹倒してるんだ、ハウンドぐらい簡単に倒せるよ

うに練習だと思って一体やってみる」

「え・・・まじ?」

「まじだ、とりあえずコツを教えてやるから聞け、ハウンドは基本的に直進して跳び上がった喉を狙って噛み付いてくるから飛んだ所をかわして斬ればいい」

そういいながらジャックは突っ込んできたハウンドを最小限の動きでかわしながら横一閃ハウンドを真つ二つにする

刀夜は剣を構えハウンドの突撃を待つ

残りのハウンド2体が刀夜とジャックに同時に跳びかかる

ジャックは先程と変わらずにハウンドを切り伏せる

そして刀夜の方を見ると何故かハウンドから4〜5メートル離れたところで啞然としている

刀夜はハウンドの跳びかかりを何とか見極めて横に避けようと跳ぶが何故か5メートルも跳んでいた

「あれ?何でこんなに?」

そう考えているうちにまたハウンドが突っ込んでくる

それをまた避けて斬ろうとするのだがまたしても5メートルほど横に跳んでしまう

数回繰り返して感覚に慣れたのかようやくハウンドの攻撃をかわして更に自分が攻撃できる位置にいった

戦闘中にのんびり考えている暇もなくいままで避けるときに物凄く自分が跳んでいたことも忘れて全力で剣を横薙ぎに振るう刀夜

前回一回だけ振っただけのど素人でしかも、剣の柄は丸いのでうまく刃を向けられなかった刀夜は剣の腹でハウンドを野球のボールの如く吹っ飛ばした

「あの体で「すごい馬鹿力だな（だわ）」」

ハウンドは街道から20メートル程離れた木にぶつかり死んだ

「俺なんでこんなに力があるんだろう・・・」

刀夜は元の世界では、そこまで力のあるほうではない。というか普通というのが似合う人間だった。

身長は172cm 体重60kg ガッチリしているわけでもないなのにハウンドを20メートルも飛ばす力は以上なものだった

「まあトウヤ、力が強いのはいいことだが剣の振り方を覚えたほうがいいな、剣がすぐにダメになってしまうからな」

「うん」

刀夜は自分の身体能力が以上に良くなっている不思議は生き死にかかるとこの世界で良いほうに働いているのでとりあえず良しとしておくことにした

それからしばらく歩いた後昼飯を食べてジャックから剣の持ち方と剣の振り方等を教えてもらい体感で30分程素振りをしたところでまた町に向けて歩き始めこの日はそれ以降2回程ハウンドに襲われたところで日が落ち始めたので野営の準備を始めた

が、刀夜はもちろん初めての事なので何をしていいのかわからないのでジャックとマウアーにどうすればいいのか教えてもらいながら初めての野宿を体験するのだった

第5話異常な力（後書き）

みなさん読んでくださってまことにありがとうございます

ユニークアクセスも1000を超え温かい感想もいただき嬉しく感動しているしだいでございます

これからもがんばっていきますのでよろしく願います

第6話間接的人殺し

日が昇る前に刀夜は目を覚ました

「トウヤもう少し寝ててもいいのよ」

「いや、なんか目が覚めちゃったからマウアー少し寝ててもいいよ」

「そう？それじゃあトウヤに甘えさせてもらうわね、日が昇り始めたら起こしてね」

マウアーはその場で横になり矢筒を枕に寝始めた

刀夜は固まった体をほぐす為に軽いストレッチをした後焚き火に昨日拾っておいた木の枝を放り込んで火の勢いを調整した

横に置いてあるショートソードを眺めながら昨日ジャックに教わった動きを思い出しながら素振りや足捌きを練習しようと思ったが二人が起きてしまう可能性があったのでイメージトレーニングをしながら日が昇るのをのんびり待っていた

日が昇りジャックとマウアーを起こし固いパンを食べ焚き火を消したりと後始末を済ませて歩き始めた

街道を歩く三人、昨日と違いハウンドにも遭遇せず順調に町へ進んでいき何事もなく二日目を終える

オランジ村をでて3日目

この日も順調に歩きラズベールまで後2時間ぐらいの距離まできていた時、馬車と馬に乗った護衛4名とすれ違った

馬車の御者は小綺麗な格好をしているが馬に乗った護衛らしき人は無精髭を生やし服装も動きやすそうではあるがぼろぼろの物を着ている

なのに馬に乗っている と刀夜は不思議に思っ て眺めていると護衛らしき人におもいきり睨まれてすぐに目をそらしていたが何故か女の子の泣き声が聞こえた

街道の周りは草原になっているのでどう考えても馬車の中しかありえないと考えているうちに馬車が横を通り過ぎていく

ジャックの近くに行き小声で話しかけた

「ジャック、あの馬車から女の子の泣き声が聞こえたんだけど・・・」

「本当か？俺には聞こえなかったが・・・まあ村でハウンドの走ってくる音を聞き取った刀夜が言うのなら本当なんだろうな、よし力マかけてみるか」

そっいつて通り過ぎた馬車のほうに行き声をかける

「悪いんだがちょっといいか？」

「なんだ？」

無愛想に答える護衛らしきもの

「ラズベールで最近女を攫って儲けてるやつがいるらしいんだが何か情報持つてないか？」

ジャックがそう言ったとき護衛が足を止める

「そんな話しないな」

そういいながらその護衛は他の3人に目配せをする

それをジャックは見逃さず当たり前だと思い瞬時に馬車に近づき馬車の幌を斬る

斬った隙間からは女の子が数名見えた

「おい何してやがる！！おい、こいつらぶっころせ！！」

そう言われて動揺している刀夜に向けてジャックが言う

「トウヤはマウアーの後ろに下がれ！！」

刀夜は女性の後ろに隠れることを恥じていたが自分が何もできないと思いマウアーの後ろに下がる

下がってからジャックの方を見るとすでに一人切り伏せている

マウアーもすでに一人をしとめていた

「ちい・・・ずらかるぞ！！」

そういつて馬に乗った残りの二人は逃げて行き

馬車も逃げようとするがすでにジャックが御者を蹴落とし馬を落
着かせて止める

血溜まりのできた死体の横を平気で歩いていくマウアーに対して刀
夜は口を押さえながらできるだけ見ないようにしながらマウアーの
後を付いて行く

二人が馬車にたどり着くときには馬車の向きをラズベールの方に戻
しジャックは待っていた

「マウアー、中にいる子達に事情を説明して中に何もなければ幌の
天井を切って女の子の肌を隠すのに使ってくれ、トウヤは俺と一緒に
こい」

ジャックに連れられ死体の所に戻る

「トウヤ、目を逸らすな、俺だって死体をみるのなんて好きじゃな
いがやらなければやられると覚えとけ、元々トウヤが気が付かなけ
ればこいつらは死ななかつた」

うつむき震えている刀夜にジャックが言う

「別にトウヤを責めているわけじゃないんだぞ、こいつらはあの馬車にいる女の子たちを自分たちで犯した後人を売ったりするような連中だ、人だつてかなりの数殺したりしてるだろう、トウヤのおかげで罪もない女の子が救われたんだからな、同情するなどは言わないが気にしすぎて何かが変わるわけでもないんだ、できるだけ割り切れるように努力するほうがいい」

そっついながらジャックは死体をどかし馬車の道を確保して馬車に戻る

「マウアー大丈夫か？」

「ちよつとまつて……いいわよ」

「マウアー後ろの幌を切つて中から後方を警戒しといてくれ、トウヤは俺と一緒に御者台で左右の警戒を頼む」

刀夜とジャックは御者台に乗りこみラズベールに向けて馬車を歩かせた

第7話ラズベール到着

馬車で進みラズベールの門についた時衛兵が十数人で馬車を囲んだ

「止まれ！！」

馬車を止め衛兵の話を聞く

「あれ？ジャックさんじゃないですか！！今日の昼過ぎに人攫に数人誘拐されたのですがここにくる途中でジャックさんの乗ってるような馬車を見ませんでしたか？」

「それなあ、この馬車だ」

「へ？・・・本当ですか！！」

「マウアー中に何人いる？」

「5人よ」

「とりあえず5人分の服を持ってきてやってくれ」

「わかりました！！誰か服5人分と女性隊員つれてきてくれ」

囲んでた衛兵の内の一人が走っていった

服等を待っている間にジャックは衛兵に状況を説明していた

話終わって少しすると女性隊員と服を持った隊員がやってきた

「それじゃあ後の事は頼むぞ」

「ありがとうございます、あとでお礼に伺いますのでいつもの宿でいいですか？」

「ああ、でもとりあえずギルドに行ったりやることがあるから宿にいくのはちょっと後になるぞ」

「わかりました、少し後で行きますね」

衛兵に後のことを任せて町に入った

町の作りは四角で周りを壁で囲んであり4方向に門があり大通りが十字に門から門まであり

大通りは店が連なっていた

刀夜はキョロキョロと周りを物珍しそうに見回っていた

「トウヤとりあえず飯食いに行くぞ」

ジャックとマウアーの行きつけの店に連れて行ってもらい遅い昼飯を食べに行った

カランカラン

「あら、お久しぶりねジャックさんマウアーさん、横の男の子は初めて見る顔ね」

「オランジ山にギルドの依頼で行ってた帰りに拾ったのよ」

「マウアーさん拾ったって……」

とりあえず席に座りジャックが適当に注文をする

ジャックに刀夜は耳打ちする

「あの人すごい美人だね」

せっかく小声で言ったのにジャックが大きい声で話す

「マウアー、トウヤがエレナに一目惚れしたらしいぞ」

「そんなこといってないじゃないか!!」

そんな風に刀夜がからかわれているとエレナさんが料理を持ってやってきた

「はい、おまちどうさま」

「おりがとよ、そうそうエレナ、トウヤがエレナに一目惚れしたってよ」

「トウヤ君っていうのね、よろしくね」

そういつて笑顔を向けられて少し赤くなってしまった刀夜をからかいながら三人は食事を楽しんだ

第8話ギルド登録（前書き）

毎度よんでくださってありがとうございます

またもや短いです申し訳ない

第8話ギルド登録

食事をした後マウアーは宿をとりに行き
ジャックと二人でギルドに行くことになった

ギルドは中々の大きさを体育館ぐらいの広さをしている

ギルドの中は元の世界の銀行や郵便局のような作りになっており窓口が沢山ある

窓口の上に看板がぶら下がっていて「新規」「受注」「依頼」「報告」「預かり」「引き出し」の6つに分かれており新規以外の各場所は2人ずつ対応を行っている

「トウヤは新規の所に行つてあとは係りの人間に聞いてくれ」

そういつてジャックは別の窓口にいつてしまった

「すみません、初めてなんですけど」

「こんにちわ、新規の方ですね、登録でよろしいですか？後ギルドについて等説明は必要ですか？」

「お願いします」

「でわ先に登録から済ませますね、まずこの水晶に手を良いと言つまで乗せてください」

刀夜は目の前に置いてある水晶に手を乗せる

手を乗せると水晶が発光し10秒ほどした後元に戻った

「はい、もういいですよ

まずギルドのランク等から説明致します、ギルドランクとはS・A・B・B・B・B・C・C・C・C・D・Eの順番でランク分けされています、Sが一番上でEが一番下です、最初はEから始まりますランクが高ければ高いほど報酬が高いが危険な依頼を受けることができます

ランクは依頼をこなしていくと上がっていきます、自分のランクの依頼を5回か一つ下のランクの依頼を20回成功させると上がります。

依頼はランク別の掲示板がありますのでそちらで自分の受けた依頼の紙を剥がして受注の窓口につってください、そこで依頼を引き受ける最終確認と諸注意等を受けて依頼を達成しに行ってくださいます。

依頼を終えて戻ってきたら報告の窓口に行き手続きをすませたら報酬を貰っておしまいです、ランクが上がって報酬が多い場合は報告後自動的にギルドの預かり所にて預からせてもらい、必要であれば引き出し窓口で引き出してもらいます

どの窓口でもさつき手を置いていただいた水晶がありますので最初に手を置いていただいてその後は指示に従ってください

これに手を置くことによってランクや依頼内容等の確認を行いますので。

先ほと言いました預かりや引き出し等は金貨や金板などは無料で預かりをさせていただいております

道具に関してはギルド管理の倉庫を有料でお貸ししています

貨幣はこのギルドでも預かり引き出し可能です、依頼の報告も可能ですが依頼の場合は普通同じ場所ですませますがランクがBから

上になると複数個の依頼の受注が可能なものでそのときには依頼を受けた別のギルドで報告を行う場合もあります

貸し倉庫は月単位での支払いになり月の替わりに自動で引き落とすか五日以内に預かり窓口にお支払いいただければ更新されます
ただし引き落としや五日以内にお支払いいただけない場合ギルドで処分いたします

これでギルドの説明は以上です、よろしいですか？」

「ありがとうございます」

「一気に説明をしたのでわからないことがあれば聞きにきてください」

刀夜は説明を聞き終えてジャックを探し歩いていると報告窓口から歩いてくるジャックを見つけた

「トウヤ登録終わったか？」

「説明も聞いたし大丈夫だよ」

「じゃあ衛兵のやつらも来る頃だし宿にいくぞ」

ギルドを出て宿に向かい歩き始めた

第9話事後報告

宿屋につくと衛兵が一人入り口で待っていた

「ジャックさんとトウヤさんですか？」

「そうだ」

「隊長が本日の件での事後処理の報告とお礼をとの事で食堂に来て
いただきたいそうです」

「わかった」

短いやり取りをして二人は食堂に入る

するとそこには女の子が5人と女の子の親らしき人達、後は昼間ジャックと話していた衛兵とその部下らしき人が一人にマウアーがイスに座っていた

「遅くなつてすまないな、それにしてもずいぶん人がいるんだな」

ジャックがそう言いながらマウアーの横に座ったので自分もイスに座る

「いえいえついさっき来たところなので、こちらのみなさんは今日の件で助けてもらった方々がお礼を言いたいとの事だったので一緒に来てもらいました。」

「私達の娘を助けていただいてありがとうございます」

泣きながらお礼を言ってきた母親や父親達に向けてジャックが言う
「礼なら横にいるトウヤに言ってくれ、こいつがいなかったら気が
つかなかったからな」

そう言うみんな刀夜に礼を言う

刀夜があたふたしているのを見てジャックとマウアーが笑っている
それを見て苦笑した衛兵が助け舟を出した

「みなさん三人も今日は疲れているし娘さんがたも疲れていると思
うので家でのんびりしてください」

そう言われて女の子達の親は帰り際に「是非食事に」「娘の婿にな
ってくださいませんか」等いろいろ言いながら帰っていった（もちろん
刀夜をメインとして）

刀夜は親達の相手から解放されてくたくたになりながらイスに座る

「おうトウヤ人気者だな」

「ジャックのせいじゃないか!!」

「でも事実だしなあ」

そう言っていると衛兵が咳払いをする

「お話中すいませんが事後報告をまずしますね、ジャックさんに聞いたとおりに街道に行って死体を回収してきました調べてところ、隣の国で有名な”霧の団”だと思われます、肩に団の印の刺青が入っていたので間違いはないと思いますが霧の団の振りをしている可能性もあるのでもう少し調べてみる予定です。それなりに大きい組織なので三人とも報復には気をつけてください、隣国との関所に連絡はしてありますが捕まるかどうかあいにわからないので、それと馬車はどうしますか？一応守備隊の方で預からせてもらっていますが」

「とりあえず必要ないから売ってしまいたいな」

「それでしたら守備隊に売っていただけませんか？」

「トウヤいいよな？」

「かまわないよ」

「金板2枚と金貨5枚でよろしいですか？」

「妥当な所だな」

「それでわ金板2枚と金貨5枚で、後事件の協力と女の子の親達からの礼も含めて金板3枚お渡します、金板だと迷惑かと思って一応金貨で持ってきましたので確認してください」

隊長の部下が三人の前に金貨の入った袋を置いていく

三人が各自目の前に置かれた袋の中身を確認する

三人ともしつかり金貨10枚入っているのを確認して入っていたことを伝えると

「今回の件本当にありがとうございました、そういえばトウヤさんには名乗っていなかったですね、ラズベール守備隊隊長のライズ」「ニコラ」パンクラスと言います、ライズと呼んでください、それでわ」

刀夜とライズは握手をした後、ライズは部下を連れて帰っていった

「ジャック、装備とかで掛かったお金返しとくよ」

「その分はオランジ村でハウンド退治の時にすでに返ってきてるしトウヤのおかげで金貨10枚も手に入ったんだ」

そう言っただけジャックは笑いマウアーがご飯にしようと言ったので三人はそのまま食堂で談笑しながら夕食を食べ、食べ終わると刀夜は眠くなってきたので部屋に戻り寝た

第10話二人との別れ

朝になり目を覚ました刀夜は備え付けの水桶で顔を洗い目を覚ました後部屋を出て食堂に向かった

「マウアーおはよう」

「おはようトウヤ」

珍しく二人で朝食を食べているとジャックがあくびをしながら食堂にやってきた

「眠そうだねジャック」

「ああ、あの後気になったことがあったからライズのところにいつてきたんだが飲みにつき合わされて寝たのが遅かったんだ」

「それにしてはちゃんと起きてくるね」

「まあ、習慣だな」

二人は朝食を食べ終わっており談笑しているとジャックが

「トウヤこの先どうする？俺たちはやることがあるから今日にでもラズベールをでなきゃならないんだが」

「え、そっか」

「まあ俺からの助言としてはとりあえずラズベールでギルドの依頼をこなして剣の使い方や物価になれてある程度自分だけでやっていけるように力をつけてからどうするか考えたらいいと思う

金貨10枚も持つてるから住むところはここを何ヶ月か単位で借りてしまえばいいしな」

「そうだよな、まず自分である程度できるようにならないとだめだよな……」

わかったここでがんばってみる！」

「マウアーすぐにでるぞ」

「わかったわ」

二人は部屋に戻っていき荷物を持って入り口まできた

「二人共ありがとう」

「気にするな、それじゃあトウヤまたな」

「またねトウヤ」

二人と別れた刀夜は宿の主人と話をしようと思い主人を呼んだ

「すいません、とりあえず金貨2枚でどれぐらい部屋を借りれますか？」

「金貨2枚ですか？それだと5ヶ月ですね」

「じゃあこれをお願いします」

宿の主人に金貨を2枚渡して契約をすませてこれから自分がどうするか考えるために部屋に戻った

第11話 装備新調

刀夜は部屋に戻って剣を腰に付け部屋をでた

とりあえずギルドで自分のできる簡単な依頼を探そうとギルドに向かつて歩いていたが武器屋と防具屋があったのでよってみることにした

「いらつしゃい」

店内に入ると武器屋と防具屋はくつついており半分ずつ別れているようだった

オランジ村とは比べ物にならないほど色々な物が置いてある

「お兄さん何探してるんだい？」

防具屋の主人にそう聞かれたので答える

「特にこれといって決めてるわけじゃないんですけど」

「おせっかいかもしれないけど最近盗賊とかが増えてるから皮製より鉄製の防具にしたほうがいいとおもうがね、皮製だとたいした腕じゃないやつの突きでも関係なく貫かれるからね」

「そうか・・・とりあえず動きやすい感じの物があつたらいいんですけど」

「そうだねえ・・・ちよつとまつてな」

防具屋の主人はいくつか防具を持ってきた

「動きやすい物でだとかんなどだな」

机の上に置かれたものは胸当て、鎖帷子、脛あて、鉄甲

「間違つてたらすまんが、君はまだギルドの駆け出しつてどこだね」

「そうです」

「本当なら鎧とかの方がいいんだが、なれないもので動きを制限されるのがいやとなるとこの程度の物になるな、肌着の上に帷子を付けて上から服を着て胸当てだな、脛あても服の上からそのまま付けれるものにした、足首も曲がるように加工してあるものだ、ただし高いがな、鉄甲は内側に皮を付けて殴っても手に負担のかかりにくいようにしてある」

「ちよつとつけてみていいですかね？」

「かまわんよ」

刀夜は全て身につけて足の動きや鉄甲を付けた状態での剣の振り等を少し試した

「いいですねこれ、全部でいくらですか」

「駆け出しに買えるかどうか実は難しいところなんだが金貨2枚と銀板5枚だな」

「わかりましたこれをお願いします」

「金持ちだな！まあいい装備しないで死んでしまうよりいいわな、この皮製のどうする？一様銀板1枚で下取りしてやれるけど」

「それじゃあおねがいします」

金貨を3枚渡し、銀板を6枚もらった

「そつえばショートソードしかもってないのか？」

「はい、何かまずいですか？」

「まずいといえばまずいがまずくないといえはまずくないが、もしショートソードが折れたりしたときに困るからナイフとか何かもう一個持っておいたほうがいいと思うぞ」

「なるほど・・・色々教えてくれてありがとうございます、横で探してきます」

「いってことよ、こっちこそありがとな」

横の武器屋に移動する

武器屋の方はなんとなく知っているものがいっぱいある

短剣、剣、槍、斧、弓、ボウガン、鎌、棍棒、フレイル等他にもいろいろなもの置いてある

刀夜は色々と眺めているとふと思いつくことがあった

こちらにきて自分の身体能力があがっているので両手剣みたいなか
いものでも持って振り回せると思ったのだ

壁にたてかけてある大剣を持つてみる

やはり身体能力が上がっているらしく軽々と持てた

「君すごい力だなとてもそれを持てるようには見えないが」

「他に似たようなものないですか？」

「似たようなものなあ・・・あ！！あるぞ、そっちの奥の剣に隠れ
てるもんがあるぞ」

探してみると大剣と同じような自分の身長と同じぐらいの剣の柄の
ある鉄の棒があった

「それなら対武器にも使えるし魔獣相手でも使えるぞ、手入れもほ
とんど必要ないしな」

「これいくらですか？」

「そんなもの欲しがる人間がいると思っていなかったからなあ、銀
板1枚でいいよ金貨1枚で胸当ての後ろにその鉄の棒付けれるよう
にしてやるうか？」

「お願いします、あとこの短剣が欲しいんですけど」

「それと合わせて銀板6枚だな」

防具屋のおつりの銀板6枚と金貨1枚と胸当てを渡してしばらく待った

「できたぞ、つけてみてくれ、鉄の棒の付け方はちょうど背中の中真ん中に押し当てるようにするとそこで固定される魔法具をつける」

胸当てをつけてみて鉄の棒を肩口から斜めにし背中に押し当てる

「手はなしてみな」

手を離してみるとすっかりくっついていて落ちない

「でもこれはずすときはどうするんですか？」

「ある程度の力が加わると外れるから何かにつつかかって取れるときもあるから注意してくれ」

力が強くなっているので案外簡単にはずせたが実際は片手ですんなりとれるものではないらしく背負うようにし肩を支点にして両手で引いてそのまま一撃を全力で喰らわせるらしい事を聞いた

装備を整えて所持金が金貨5枚になった

店を出て今度は道具やに向かった

道具屋ではウエストポーチみたいなベルトと肩にかけれる袋を買い解毒の丸薬と傷用の塗り薬に包帯と店の人に頼んでそろえてもらっ

たものウェストポーチに入れる

店を出たころには日も落ち始めていたのでギルドに行くのをあきらめて宿に戻った

第12話依頼の受注

昨日は装備を整えたり道具を買ったりして遅くなってしまったので今日はまっすぐギルドに向かう

ギルドの中は相変わらず人が多くそこそこ騒がしい

掲示板を見に行く前に手持ちの金貨を預けることにした

「預かり」看板の窓口に行き水晶に手を置く

「金貨を4枚預けたいんだけど」

「はいわかりました、もう一回水晶に手を置いてください」

「もういいですよ、お預かりしているのは全部で金貨4枚です」

礼を言ってEランクの掲示板に向かう

掲示板を眺めているといくつか自分ができそうなものがある

（”依頼人 場所 内容 報酬 備考”）

”ギルド連合 ラズベール周辺 ハウンド退治 ハウンド一体銀貨8枚 詳細は窓口まで”

”ラズベール商人連合 ラズベール内 道具・防具・武器屋等配達 一日銀貨3枚＋歩合”

”ラズベール防衛隊 ラズベール内 夜の町見回り 一日銀貨5枚 食事あり 詳細は窓口まで”

刀夜は悩むが昨日装備を新しくしたのだからと思いハウンド退治をすることにした

「受注」窓口に行き水晶に手を置き掲示板の紙を渡す

「ハウンド退治ですね、ハウンドの尻尾が証明部位です、何体でもかまいません、3体につきギルドのランクポイントが一加算されます、どうされますか？」

「お願いします」

「でわ水晶にてを置いてください・・・いいですよ、部位証明用の袋使われませんか？」

「はい」

依頼の手続きを済ませて袋を渡してもらいギルドを出て

ラズベールに来た時の入り口に向かった

途中でどれぐらいの時間かかるかわからないので干し肉と水を買っておいた

入り口の検問を通るとき声をかけられた

「おはようございますトウヤさん」

「あ、おはようございますライズさん」

「今日はどうしたんですか？」

「ギルドの依頼でハウンド退治に行こうと思ひまして」

「それならこちら側じゃなくて反対側から出て少し歩いて右手側にある森付近ならそこそこいますよ、森の中に入ると急に数が増えるので森の手前で狩るのがいいと思いますよ、後これをどうぞ」

「これは？」

渡されたのは何かの金属板、元いた世界では見たことが無いものだった

「ラズベールの通行手形みたいなものです」

「ありがとうございます、行ってきますね」

「お氣をつけて」

ライズと別れ反対側に向けて歩く

反対側の検問で先ほどもらった金属板を衛兵に見せる

「どうぞお通りください」

他の人はそれなりに時間がかかるらしいが刀夜はライズのおかげですんなり通ることができた

第12話依頼の受注（後書き）

中々すみませんが

じわじわ書いていくので気長にお願いします

第13話脅威の力

ラズベールの門を出て街道を30分ほど歩いたところで右側の森付近に気配がある

刀夜が気配のするほうに近づいていくとハウンドが飛び出してきた

刀夜は右に跳ぶ

5m程横に跳んだ後ハウンドを確認して背中 of 鉄棍棒を構える

構えたところで既にハウンドは刀夜に向かって走ってきていた

刀夜は二回のハウンドとの戦闘と自分の力によって戦い方を見出していた

ハウンドが跳んできた所を野球の感覚で鉄棍棒を振りかぶって打つといういたって単純な方法だ

ハウンドの跳んだタイミングを見計らって鉄棍棒を振る

刀夜の強化された腕力により鉄棍棒のスイングが物凄いことになっていてあたったハウンドの頭は血を飛ばしながらちぎれ飛んでいった

だが力が強すぎて弾き飛ばす力よりも破壊の力が強かったせいでハウンドの頭のない胴体が走ってきた勢いのまま刀夜にあたってしまった

「いて」ハウンドに当たった事により油断していた刀夜はバランスを崩して倒れてしまった

そこに森から5体のハウンドが刀夜めがけて走ってくる

それを見た刀夜はあわてて立ち上がる

立ち上がった所ですでにハウンドが牙を？きだして跳んでくる

最初と同じように刀夜は横に跳んで距離をとりながらかわす

武器を構えたいがさつき倒れたときに鉄棍棒を離してしまっていた為仕方なく腰のショートソードに手をかけようとするがハウンドの5体のうち2体は時間差できていた為刀夜がよけるために跳んだ時瞬時に方向転換をして近づいてきていた

鞘から抜くよりも早くハウンドが跳んできたためあわてて横に跳んで避ける

そうすると今度は最初にきていた三体が跳んでくる

それもなんとか回避するがじこのままだとじり貧だと思い2体が跳んできたときに鉄甲で片方を防ぎもう片方を殴り飛ばすがガードしながらなので踏み込めないのと振りぬけないことでダメージはほとんどない

そしてまた3体が突っ込んでくる

（やっぱり武器を使わないと倒せないよなあ）

そう思いながら避け続ける

そこで気がつく

（横に避けるから次がすぐにこれるんだ！）

刀夜は横に跳んで避けるのをやめて上に跳ぶ

上に跳んだことにより攻撃をしてきたハウンドの2体が刀夜を見失う

横に避けたところを攻撃しようと思っていた残りの3体はその場で止まり刀夜の跳んだ上を見る

刀夜は跳んだ後ショートソードを鞘から引き抜き上段に構え地面に着地しながら近くのハウンドに向けて振り下ろす

ドン という音と地面を沈めた場所から近くにいたもう一体のハウンドに向かって走りハウンドを真つ二つに切り裂く

残りの三体の方を向く刀夜

三体はタイミングをずらして刀夜に襲い掛かるように一列になって走っていく

それがまずかった

刀夜は最初の一体を軽くかわしてそのまま斬る

斬った後回し蹴りを放ち二体目を弾き飛ばす

三体目は二体目を弾き飛ばした蹴り足をそのまま戻す形で踵で逆方向に弾き飛ばした

二体目は鉄製のガードのついた蹴りなので死んだが三体目はかろうじて命をつなぎとめていた

刀夜は近づいていきなんとか生きているハウンドの頭にショートソードを突き刺して止めをさした

第14話初めての依頼完了

ハウンドを倒した刀夜はショートソードを振りハウンドの血を飛ばして鞘にしまう

途中で落とした鉄棍棒も拾い振って血を飛ばそうとするが少し乾いていて飛ばしきれない

血を飛ばすことを一旦諦めてハウンドの証明部位の尻尾をナイフを使って切っていき6本の尻尾をギルドでもらった袋に入れておく

街道沿いにちょうどいい大きさの岩が見えたのでそちらに歩いていき休憩しようと思っていた

森の方を背にして歩いていく刀夜に気がつかれないようにゆっくりだが確実に距離を縮めていくものがいた

刀夜の以上にあがった聴力により刀夜は後ろから気がつかれないように迫って来る二体のハウンドの存在に気がついていた

気がつかれてないと思っているハウンドは残り5mぐらいのところ
で人間を食べる事への食欲が我慢できなくなり刀夜に向かって走り出す

刀夜は後ろのハウンドの動きが走った途端に尻尾の入った袋を下に落とし鉄棍棒を背中からはずして音でハウンドの位置と距離を把握する

鉄棍棒の射程に入った瞬間ハウンドを見ずにそのまま鉄棍棒を振り

ハウンド二体をまとめて吹き飛ばした

吹き飛ばしたハウンドの近くに行き先ほどと同じように尻尾を切断して袋につめる

つめ終わった後周囲に何もいないことを確認して岩までいこうと思っていた刀夜だがハウンドをすでに8体も倒しているのでそれなりに換金できると思いラズベールに戻ることにした

街道を歩きラズベールに戻ってきた刀夜は門でライズにもらった金属板を見せてすんなり通してもらいギルドに向かった

ギルドの「報告」窓口に行き水晶に手を乗せ袋を渡す

「しばらくおまちください・・・ハウンドの討伐依頼でしたね、8体の討伐という事なので銀板6枚と銀貨4枚です。ギルドランクはあと2回でDに上がります。それでわ水晶に手をお願いします」

水晶の発光が終わり銀板と銀貨を受け取り銀板3枚を腰の道具入れに入れておき残りを財布用につかっているちいさい袋に入れて窓口から離れる

Eランクの掲示板を見て出発時から新しいものがないか確認して特にないのでギルドを出す

今回の戦闘で武器に傷がないか確認してもらいに鉄棍棒を買った武器屋に向かった

武器屋の主人にショートソードと鉄棍棒を渡して状態を見てもらった

「どっちも問題ないが手入れの仕方しってるか？」

「わからないです」

武器屋の主人にショートソードの手入れの仕方を教えてもらい手入れの道具を銀板1枚で買う

鉄棍棒は手入れ不要で強いて言えば洗って水分をふき取るだけらしく無料でやってくれた

武器屋の主人に礼を言って武器屋からでて宿に帰りまだ日も落ちてないので鉄棍棒や防具をはずして町の散策にかけた

第15話街の状況

初めてのギルドの依頼も無事に済ませ装備も外し開放的になった刀夜は大通りにある店で食べ歩きができそうなものを探して歩いた

しばらく周りの店を見ながら歩いていると焼き鳥っぽいものを売っている店を見つけた

「すみませーん、一本ください」

「兄さん、三本で銅貨1枚なんだけどいいか？」

「それじゃ三本で」

ズボンのポケットから財布（小さい袋）をだしその中から銀貨を一枚出して渡した

「おつりが銅貨9枚と・・・そのまま持つか？」

「そうですね、そのままでもいいですよ」

おつりを先に貰い財布に入れてポケットにしまった後焼き鳥っぽい物を貰った

「ここで食べてもいいですか？」

「ああいいぞ、食べ終わったら串をそこにぶら下がってる袋にいれといてくんな」

その場で食べていいと言われたのでその場で食べる

「うつまー、ビールほしいー」

味がまんま焼き鳥と一緒につついっついビールがほしくなって言っ
てしまった刀夜に

「そんなに喜んでくれるのはうれしいねえ、ところでビールってな
んだ？」

「ビールはお酒ですね、自分の故郷のお酒ですよ」

そういつて軽く流しながら袋に食べ終わった串を入れた

「おいしかったですよ、いつまで売ってますか？」

「けっこう遅くまで売ってるぞ、売り始めが昼すぎからだけどな」

「わかりましたー、また来ますね」

「おう、ありがとよ」

焼き鳥屋を離れ再び街を歩く

大通りはそれなりに人が歩いており立ち止まって眺めていられるよ
うな状況ではなかったので気になる店があっても素通りした

道具屋、武器屋、防具屋は十字の大通り中心から各方向に一軒ずつ
あったり宿屋、酒場、食材屋、食堂等もかなりの数あり高級そうな

所から大衆的な所まで色々あった

そうやって今日は店には入らずどこにどんな店があるかを大体把握して宿に戻ることにしたが宿の食堂に日本酒に似たような酒があったのを思い出し焼き鳥屋に寄って持っていた銅貨9枚分買ってから宿に戻り食堂で日本酒に似ている酒を1?ぐらいのガラス瓶と中身が水の同じ瓶とコップを貰い部屋に戻って久しぶりの一人晩酌を楽しんだ

第16話 二日酔いイライラ

前日一人で飲んでいて二日酔いになってしまった刀夜は頭痛がする頭を押さえながら食堂に行き水を貰い一息ついたその時に

「すみません、トウヤさんでしょうか？」

後ろから声をかけられて振り向くと衛兵が立っていた

「そうですけど、何か用ですか？」

「ライズ隊長が呼んでいますのでよろしければ今日中であればいつでもいいのでオランジ方面の門横の詰め所に来て頂けますか？」

「わかりました、二日酔いで今は辛いので落ち着いたら行きますよ」

「ははは、わかりました、そう伝えておきますね、それでわ失礼します」

衛兵が食堂からでていき刀夜は二日酔いを鎮める為に果物を食べようと思ったのだが食堂には置いてないらしく宿を出て5軒横に店がある事を聞いて買いに行くことにした

宿をでてのろのろと頭を押さえながら歩いていたのですがやはり大通りは人が多く四方から人の声がする

宿を出てまだ2軒ほどしか進んでないのだが、二日酔いの刀夜は人の声が頭に響き気持ち悪くなり耐えられなくなりうすぐらい路地に

入って休憩しようと思い大通りの喧騒から抜け出した

そこでまっていた出来事に刀夜はイライラを我慢できなくなり反射的に言ってしまった

「こんなところで何してやがる！！こっちは二日酔いでツレーのに馬鹿野郎が！！」

大声を出して自分の声でまた頭痛がひどくなり気持ちも悪くてしゃがみこんだ

目の前にいたのは少女を壁際に押さえつけて何かしようとしていた男が三人

その中の一人が

「なんだテメーは、なめてんのか！！」

そういつて近づいてきてしゃがみこんでいる刀夜の腹に蹴りをいれた

「うがぁ・・・・・・・・・・（ゲロゲロゲロゲロ）」

気持ち悪くて辛かった刀夜は腹に蹴りをくらいその衝撃で吐いてしまった

「このぼけが！！からんでくんじゃねえよ」

刀夜を蹴った男は少女の方に戻っていく

いたが仲間の叫び声により意識を取り戻し地面に倒れて叫んでいる男を二人で抱えながら目の前の刀夜から逃げていった

第17話面倒だらけ

逃げていった男達から解放された少女は刀夜に恐る恐る近づいてきた

「あの、ありがとうございます」

「え、何かした？」

「え．．．．．」

少女は自分の事を助けてくれた刀夜にお礼をいったのだが帰ってきた言葉にがっかりしていた

それもそのはず、元の世界でもそうだが自分の窮地を救ってくれたはずの人間が自分を助けたことすらわかっていない返事をされたら最初は白馬に乗った王子状態だったのが一気にがっかりするのもうなずけるだろう

一方刀夜は本当にわかっておらずただ単にさっきの男達が騒いでいて頭痛がして休憩できなかったからイライラの勢いで相手に怒鳴って蹴られてしまい、イライラMAXのプツン状態になってやってしまっただけで自分が少女を助けたなんて思ってもいない

「あなたがさっき追い払ってくれた男達に襲われてた所を助けてもらったの」

「ああ、そうだったんだ．．．イテテテテ」

「蹴られたお腹が痛むんですか？」

「いや、二日酔いで頭が」

そついいながら頭を押さえる刀夜を見て少女の中の王子様は完全に消えていなくなった

だが自分を助けてくれたことは事実で頭を押さえて痛がっている刀夜を置いていくわけにはいかないと思った少女は刀夜に

「ちょっとまっててくださいね」

そつ言つて大通りの方へ走つていった

刀夜は地面に座り頭痛が引くのを待っていた

数分すると少女が戻ってきて刀夜にフルーツジュースと水を持ってきた

「お父さんが酔っ払った次の日にこれ飲んで良くなってるから飲んでみて」

「ありがとう」

まずフルーツジュースを渡されてゆっくり飲んでいきコップを返して水をもらう

水を一気に飲んで水の入っていたコップも返す

「ちょっとコップ置いてくるね」

少女はまた大通りの方へ走っていきちょっとするとまた戻ってきた

「そっいえば名前教えてもらえますか？」

「刀夜って呼んでくれ」

「トウヤね、私はヴァレリー」エリアーヌ「パンクラス、ヴァレリーって呼んで」

「よろしくヴァレリー」

「よろしくねトウヤ」

刀夜から手を出し握手する

最近来てしばらく町にいる事や料理がおいしいお店等を教えてもらったりとのんびり話していると頭痛が少し治まってきた

かわいい女の子としゃべってしかもその女の子に親切にってもらってイライラも吹っ飛び体調も良くなってきたのでとりあえず用事を済ます為に詰め所に行く事にした刀夜はヴァレリーに詰め所に行く事を伝え行こうとしたらさっきの事を言いに行くらしく一緒に詰め所に行くことになった

第18話 セーフ

二人で会話しながら詰め所にたどり着いた刀夜は入り口付近にいた衛兵に声をかけようとしたが相手がこちらに気がつき声をかけてきた

「ヴァレリーちゃんじゃないか、久しぶりだね、ところで横の人は彼氏かい？」

「お久しぶりカールさん、彼氏じゃないわよ、兄に用があつて来ただけでございますか？」

「ライズ隊長なら隊長室にいるよ、横の人も一緒にかい？」

「ライズに呼ばれて来たんだけど」

「ひょっとしてトウヤさんかい？」

「そうです」

「隊長から聞いてるんで案内します、ついてきてください」

刀夜とヴァレリーはカールの後ろについて詰め所の中に入っていった詰め所はそれなりに広く玄関口を入ったらすぐに広い部屋があり食堂の用に長いテーブルが何個もあり壁際に各自の装備を置く木でできた長細い棚がある

一番奥の端に階段がありそこを上がると廊下に何個か部屋があり突

き当たるとまた階段がある

二階は会議室と隊長の部屋で三階は衛兵達の仮眠室があるらしい
隊長室に着き衛兵がドアをノックする

コンコン

「失礼します、トウヤさんとヴァレリーちゃんを案内してきました」

ドアの向こう側から

「はいれ」

ドアを開け中に入っていく衛兵に続いて部屋に入る

「カールありがとう、戻ってくれ」

「失礼します」

カールは部屋から出て行きドアを閉めた

「トウヤ呼んですまないね、ところでヴァレリーがなんで一緒にいるんだ？」

「その事なんだけど、さっき大通りで買い物しようと思っていたら男三人組にからまれて路地につれてかれたの、そこでトウヤが偶々来て助けてくれたの」

「本当か、トウヤ度々すまないな、妹を助けてくれてありがとう」

ライズが刀夜に頭を下げると刀夜が

「あの、結果的にはそうなんですけど、二日酔いで大通りにいると人の声が頭に響いて路地に入って休憩しようと思ったときに三人組みがうるさかったので頭にきてしまつて喧嘩になつただけで、ヴァレリーがいたことすら知らなかったですし・・・」

「いや、妹を助けてくれたことに変わりはないし礼だけはちゃんと言っておきたい、ありがとう」

「ところで、俺相手に怪我させちゃったんだけど罪に問われるかなあ？」

「何もないよ、むしろ礼金でもださないといけないぐらいだよ」

「それならよかった、けど礼金とか要らないからね、それより今日の用事はなんだった？」

「ああ、とりあえず座ってくれ」

そう言われソファーに座る

「この前の人攫い、霧の団の事なんだが、この街にまだ数人潜伏してるらしいと情報が入ったのでそいつらがトウヤの事を聞いたら復讐にくるかもしれないから気をつけてくれって話だ、門での検問を強化しているから霧の団の生き残りが戻ってくる事もないと思うが一応気をつけてくれ、肩の刺青を隠して入ってきていればわからんからな、まあ嚴重に検査はしているがね」

「兄さん、肩の刺青ってどんなの？」

「ん、ドラゴンをぼんやりとさせた感じのマークだな、そんなこと聞いてどうするんだ？」

「私を襲おうとしていた三人の内の一ににあったような気がする・
」

「何!!、本当か!」

「そのうちの一人はトウヤに足を折られてるからすぐに見つけられると思うわ」

ライズは立ち上がり衛兵を呼ぶ

呼ばれてきた衛兵に指示を与えたライズが刀夜に

「トウヤ今日はありがとう、霧の団の残党を捕まえたら連絡するか
らその時はまた来てもらえるかな？」

「わかった」

「とりあえず今日は宿に戻ってくれてかまわないが万が一帰りに襲
われるとまずいから一人兵士をつけるよ、ヴァレリーもな」

兵士が三人きて二人ヴァレリーに付き残りの一人が刀夜に付くらしい

「それじゃあトウヤまたね」

「またな、ヴァレリー」

詰め所の前でヴァレリーと別れ、ライズに付けてもらった兵士と宿に戻り

兵士に礼を言っ て刀夜は宿に入った

第19話朝から

朝起きた刀夜は顔を洗って食堂に下りて行く

食堂に昨日詰め所で案内してくれたカールがいた

「カールさん、おはよう」

「あ、トウヤさん、おはよう、昨日の事なんですが今大丈夫ですか？」

「いいけどここじゃまずくない？部屋に行ったほうがいいかな？」

「できたらそのほうがいいですね」

「それはかまわないけどさ、カールさん朝飯食べた？」

「それがまだですって」

「じゃあ部屋に持っていけるもの頼んで持っていこうか」

刀夜は食堂のおばちゃんにサンドイッチを作ってもらった

サンドイッチとコーヒーに似た飲み物を持ってカールを連れて部屋に戻る

部屋に戻りテーブルにサンドイッチとコーヒーを置いてイスに腰掛ける

「カールさん立ってないですわりなよ」

「呼び捨てでいいですよ」

「じゃあ呼び捨てで呼ぶけどさカール無理してしゃべってるでしょ、普段通りの話し方でいいよ」

「すみませんね、敬語は苦手で」

「はは、俺もそうだよ、なんちゃって敬語になるからね、まあとりあえず食べよう」

「じゃあ遠慮なく」

二人はのんびりサンドイッチを食べコーヒーを飲んで朝の食事時間を満喫していた

「あのさカール、飯食べにきたわけじゃないっしょ？」

「あー！しまった、えっと昨日の事なんですけどあの後すぐに薬や包帯等を扱ってる店や救護所、それに闇医者 of 所まで調べてすぐに三人組が見つかったのとヴァレリーちゃんが確認もしたので間違いなく捕まえる事ができたから普通に生活してもらって問題ないって隊長が言っていましたよ、後隊長が今回と前回と二度も助けてもらったし礼がしたいって」

「そっか、すぐに捕まえてよかったね、こっちもギルドの依頼こなしで稼がないといけないし、はやく終わってよかったよ、それにしてもライズも固いねえ、前回はちゃんと報奨金もらってるし、今

回らないっていったのになあ」

「まあ隊長も妹を助けてもらって何もなしじゃ気になるんですよ」

「じゃあライズに今度飯食わせてって言っというて」

「はは、じゃあそう言っておきますよ、早く戻らないと隊長の小言をくらうんで、それじゃ」

「ん、それじゃあ俺に飯付き合わされたって言って、それじゃあなあー」

廊下をドタドタ鳴らしながらカールは急いで帰っていった

第20話 こなれて失敗

刀夜は装備を整えてギルドに向かった

ギルドに辿り着きEランクの掲示板を見る

” ギルド連合 ラズベール周辺 ハウンド退治 ハウンド一団銀貨8枚 詳細は窓口まで ”

” ラズベール商人連合 ラズベール内 道具・防具・武器屋等配達 一日銀貨3枚＋歩合 ”

” ラズベール防衛隊 ラズベール内 夜の町見回り 一日銀貨5枚 食事あり 詳細は窓口まで ”

前回とまったく変わってないのでまたハウンド退治に行くことにした

「受注」窓口に行き水晶に手を置き掲示板の紙を渡す

「ハウンド退治ですね、ハウンドの尻尾が証明部位です、何体でもかまいません、3体につきギルドのランクポイントが一加算されます、どうされますか？」

「お願いします」

「でわ水晶にてを置いてください・・・いいですよ、部位証明用の袋使われますか？」

「はい」

依頼の手続きを済ませて袋を渡してもらいギルドを出て前回と同様
詰め所とは逆方向の門へ向かう

前は途中で昼食等を買っていったが今回は宿を出る前に食堂で朝
と同じサンドイッチを作ってもらい持ってきていたので寄り道をせ
ずに向かった

門の衛兵にライズからもらった金属板を見せすんなり通してもらい
前回ハウンドが出た所付近まで歩いてきた

辿り着いたはいいがハウンドが出てきそうにないので森付近をうろ
うろしているとハウンドが森から飛び出してきた

前回でだいぶ慣れていたので飛び出てきたハウンドを背中の鉄棍
棒で弾き飛ばす

4匹までは順調に飛ばしていたのだが

調子に乗っていた事で隙がうまれ残りの一匹に噛みつかれそうにな
るが強化されたスピードでぎりぎりかわして反射的にハウンドを飛
ばしたが4匹と違い焦った事で全力で叩いてしまったので森の中に
飛んでいってしまった

「あせったあー」

刀夜は調子に乗ったことを反省しつつ

森の中に飛ばしてしまったハウンド一体もつたいないと思いつつ
うまいこと倒せた4匹の尻尾をナイフで切り落として、ギルドで貰
った袋に入れてハウンドの死体を一まとめにし、血の臭いにひかれ

てくる奴を狩ろうと思いい少し離れた場所でハウンドや他の相手をで
きそうな奴がくるのを待ちながら昼食を食べることにした

持ってきた水で手を洗ってからサンドイッチを食べのんびり待つて
いると

森の中から2 mぐらいの棍棒を持った人型の化け物がでてきた

第21話死にかけの

棍棒を持った人型の化け物はゆっくり刀夜に近づいてくる

刀夜は立ち上がり鉄棍棒を構える

（今の力ならあの化け物の棍棒ごとこれでふきとばせるはず）

そう刀夜は思い化け物と正面から戦うことに決めた

ゆっくり化け物が近づいてくる

最初はゆっくりだった化け物の動きが段々早くなっていく

15 m程離れていたがすでに10 m程になっている

さっき倒したハウンドで調子に乗って反省したつもりになっていただけの刀夜は自分より大きい相手ですらこっちにきて強化され鉄棍棒を振り回せる筋力に自身を持っていた

化け物は右肩に棍棒を担ぎ歩いてくる

刀夜は棍棒事叩き壊す気である為下から上に振り上げるために下に構える

化け物が2 mまで近づいてきたところで化け物が棍棒を振り下ろしてくる

刀夜はその棍棒を迎え撃つ為下から一気に鉄棍棒を振り上げる

”ガギン”

鈍い音がして刀夜の鉄棍棒が吹き飛んでいく

「うあああああああ」

刀夜は右手を押さえながら痛みのため叫ぶ

そんなことはおかまいなしに化け物は棍棒を振り上げる

「ガハ・・・」

化け物の棍棒を胸に受け刀夜は吹き飛ばされた

鉄の胸当てをしていたおかげでダメージは大きいながらも死ぬことはなかった

刀夜は息が出来なく右手と胸の痛みも半端なものではないがこのままではじつとしていると殺されてしまうのがわかっていている刀夜は必死で痛みをこらえて化け物を見る

吹き飛ばされたおかげで本当に僅かだが考える時間が生まれた

（いてえ、どうする？このままだと殺される、動けるか？足は問題ない、痛みで町まで逃げれそうにない、どうする？まず立ち上がることからだ）

「ぐっぐっぐ」

痛みを気力で押さえながら立ち上がる刀夜

化け物は刀夜にかなりのダメージを与えて何とか立ち上げられる程度だと思っっているようでのんびり近づいてくる

刀夜は動こうとするが少しでも力を入れると胸の痛みが響いてくる、右手からもうすごい痛みが走ってくる

だが死ぬ可能性の方が高い今の状況で痛いから動けないなんて甘いことは言ってられない

化け物が近づいてきているがゆっくりなおかげで痛みを耐える覚悟を決めるには十分だった

化け物が刀夜の頭目掛けて棍棒を振り下ろす

「くっ」

それを刀夜は痛みに耐えながら横に跳んでかわしながら距離をとる

距離をとり痛みを必死に堪えながら刀夜は呼吸を整えようとする

化け物は一瞬、獲物がまだこんなにも動けることに驚いたが見てみると苦痛に歪んだ顔を見るとそう長くは持たないことを察したが早く仕留めようと走り出す

刀夜は呼吸をなんとか整えようとするが化け物が走ってきて棍棒を振り下ろしてくるのでまた横に跳んでかわす為呼吸を整える暇がない

横に跳んでよけるので化け物は横なぎに棍棒を振るう

刀夜は後ろに跳んでかわす

徐々に動きが悪くなっていく刀夜

それを全力で追いかけて棍棒を振るう化け物

このままだとあと数回しか持たない所で遠くから矢が飛んできた

第22話魔法（前書き）

大変間があきました

そして駄文ですみません

体調不良＋仕事の急がしさ

そして地震の影響で執筆できませんでした

休みがないので中々考える事もできないのですみません

お気に入りをもそのまま残してくださっている方

本当にありがとうございます

第22話魔法

ヒュン

ダッ

「ヴォアアアアアアアアアアアア」

遠くから飛んできた矢は化け物の目に刺さった

ブオン ブオン

化け物は痛みには耐えかね叫びながら棍棒を振り回す

ヒュン

ダッ

化け物の残っていたもう片方の目も矢によって潰された

刀夜は痛みで我を失っている化け物から最後の力を振り絞って距離をとる

「大丈夫か、少年」

いつの間にか刀夜の横には綺麗だが耳がとんがった女性が立っていた

「ヴォアアアアアアアアアアア」

化け物は叫びながらひたすらに棍棒を振り回している

「この町の近くにいないはずのオーガが何故いるんだ？」

刀夜の横に立っている女性がそう呟きながら弓を構える

「とりあえずうるさいから倒しておくか」

そう言うなり女性の指が光ったと思ったなら矢の先端に光が移る

「炎の精霊よ我を糧とし力を貸せ、フレイムアロー」

ヒュン

絞った矢を放った瞬間

矢が炎を纏って飛んでいく

ダッ

化け物にあたった時、化け物が火だるまになった

そこで刀夜は意識を失った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4580p/>

がんばれ元サラリーマン

2011年4月29日10時52分発行